

小学校国語教科書における作文単元の文種の推移

——生活文から論理的文章へ——

木 本 一 成*

はじめに

大学生は、大学入学以前にどのような文章表現指導を受けてきたのだろうか。大学進学を目標とする高等学校では、入試合格を目標とするため、文章表現指導の中心は小論文であり、論理的思考力・表現力の育成に特化した指導が行われている。これに対して義務教育段階、とりわけ論理的思考力・表現力が未発達の小学校ではどのような指導が行われているのだろうか。

このことについて、教科書の作文単元の文種の変遷という点から考察してみたい。我が国の文章表現指導の歴史には、生活綴方という大きな遺産がある。生活文は、自ら体験したことを題材にして、過去の出来事を一人称主語でありのままに再現的に表現する文章である。書く内容が学習者にとって身近であるとともに、特別な表現方法を必要としないという点で学童期の学習者に適した文種である。また、過去の出来事を再現する過程で自己を見つめるという反省的な活動を仕組むことができるという点で、教師が指導の意義を実感しやすい文種でもある。しかし、この生活文は、現在では教科書から減少し、論理的文章教材に置き換えられている。生活文から論理的文章への転換にはどのような意義と課題があるのだろうか。

1. 教科書に生活文が取り上げられてきた背景

生活文とは、「子どもが生活の中で経験するさまざまな事象をとらえ、その事実や、事実について感じたり考えたりしたこと等を自分なりの言葉で記述した文章。自己表現の作文の一つで、社会的実用性には直結しない」¹⁾ 文章である。また、生活文は、説明文、記録文、報告文、手紙などの様々な文種の一つとして取り上げられると同時に、他の文種の特性も併せもつという面があり、「『生活文』だけは、文章の種類・形態というよりも作文の素材からつけられたものであり異質である。この『生活文』を文種として認めないという説もあるが、現行の教科書では主流を占めている」²⁾ とされる。

長い間、生活文が教科書教材として普及した理由の一つを、生活文のこのような特徴に見いだすことができる。つまり、生活文の「文種として認めないという説もある」という困った特性が、作文教材づくりにおいては都合良かったのである。文章の種類・形態が一様ではないということは柔軟に形態を変えることができるということでもある。生活文をもとに、主張の側面を強調すれば意見文ふうの文章（生活意見文）ができあがり、見聞したことを整理し詳述すれば記録文ふうや報告文ふうの文章になる。生活文の基礎さえ習得すれば、どんな題材であろう

* 広島経済大学経済学部准教授

と、構成や表現を少し修正することで、意見でも記録でも報告でもそれふうの文章を書くことができるのである。しかも、生活文の基礎は、過去形を基本とする一人称主語の文体を用いてありのままに書くことであり、決して高度な技術が要求されるものではない。

もう一つ、生活文の普及には、戦前からの生活綴方の影響を見逃すわけにはいかない。生活綴方の伝統を受け継いだ日本作文の会は、生活指導的な側面から文章表現指導への転換をはかりながらも、子どもたちが生活文で自分自身のことを表現すること（自己表現）を一貫して重視してきた。その指導によって、子どもが書いた文章の中に学習者の認識の変容が見られたり、また、学習のねらいを超えて優れた作品がうまれたりすることがあった。このような経験が、生活文に対する現場の教師からの支持を集め、維持することにつながったのである。

2. 教科書掲載の文種別作文単元の実態

ここ10年あまりの間で小学校教科書の作文単元は大きく変わった。

表1は、2011年版教科書の作文単元を文種別に分類し、その単元数を整理したものである。

最も多い文種は論理的文章（説明、記録、意見など）であり、その次が文学的文章である。生活文は論理的文章に比べるときわめて少なく、M社においては1単元しかないという状況である。（文種の区別は教科書会社の表記をもとにしたが、表記がない場合は筆者が分類した。また、詩は文学的文章に分類したが、生活文に含めたほうがよいものもあった。分類の仕方については再検討し修正する必要がある。）

さらに、M社について1993年版（表2）と比較すると、生活文の減少と論理的文章の増加がうかがわれる。ここでは示していないが、他社についても類似の傾向にある。これは、生活文から論理的文章への変化というよりも、生活文

表1 文種別の作文単元数（2011年版）

		生活文	論理的文章	文学的文章	通信文	その他
M社	6年		3	1		1
	5年		3	1		
	4年		4	1		
	3年		3	1	1	
	2年	1	4	2		
G社	6年		3	2		1
	5年		3	2	1	1
	4年	1	3	2	1	
	3年	1	2	2	1	
	2年	1	2	2	1	
T社	6年		4	2		
	5年	1	3	1		
	4年	3	2	1	2	
	3年	1	4	1	1	
	2年	1	4	2	1	

表2 M社旧版の文種別の作文単元数（1993年版）

		生活文	論理的文章	文学的文章	通信文	その他
M社	6年	1	2	1		2
	5年	2	1	2		2
	4年	1	1	2		1
	3年	2	1	2		
	2年	3	1	1		1

論理的文章＝記録・報告・説明・意見
 文学的文章＝短歌・俳句・詩・物語
 通信文＝手紙

という未分化の表現様式から、論理・文学・通信などの固有の表現様式への変化であるということもできるかもしれない。

なお、ここでは作文単元を取り上げたが、書くことの指導は作文単元のみで行われるものではない。教科書には「読むこと」「話す・聞くこと」の教材があり、そこでは関連指導として「書くこと」を想定した単元もある。ほとんどの

場合、書く分量が少なく、文種が想定されていないためこの度の調査では対象外としたが、文種の実態を正しく把握するためには再検討が必要である。

3. 論理的文章表現の増加の理由

生活文から論理的文章への変化を決定づけたのは、OECD が実施した生徒の学習到達度調査 (PISA) である。調査結果から日本の子どもの表現力の問題があらわになると、生活文では国際標準の読解力・表現力が育たないという指摘が強く言われるようになる。もちろん、このような指摘は、PISA 実施のはじまる前から多くの教育者によって繰り返し問題視されてきた。

たとえば、渋谷は、生活文という枠組みで論理的文章を書かせることについて次のように述べ、生活文指導では、取り上げる対象を分析・記述することが軽んじられ、気持ちの問題にすり替えてしまいやすいという問題を指摘した。

「生活文指導の現在の克服すべき問題点は、作文の題目 (取材の範囲) が、児童・生徒の生活体験内の事柄に限定されて狭くなりがちであるだけでなく、例えば『パン造り工場を見学』という記録文の指導においても、児童の気持ちや感想を出させすぎることである。自己の心情をなるべく表に出さないようにして、対象それ自体を出来るだけ客観的に見て、そのものを書くという『パン造り工場』の仕組みの記録ではなく、『パン造り工場を見学しての感想』になってしまうのである。」³⁾

また、香西は、教科書掲載の児童作文 (生活意見文) を取り上げて次のように痛烈に批判した。

「要するに、意見とは、本質的に先行する意見に対する『異見』として生まれ、たとえそれが具体的な明確な形では現れなくても、対立する意見に対する『反論』という性質をもっている。意見を述べるとは、反論することだ。反論とい

う行為は、議論の一要素などというものではなく、議論の本質そのものなのである。」⁴⁾

「現行の意見文指導では、ディベートほどにも、『意見を言う』ことの意味が理解されていないようである。誰も反対しないようなことを、平気で『意見』文として書かせているからだ。私はこれが、国語教育での議論指導を低調ならしめている遠因であるとにらんでいるので、ここで少し時間をとって批判してみたい。」⁵⁾

香西は、「反論という行為」が意見の本質であることを明確に示した上で、共感による説得という方法を用いる生活文では論理的表現力が育成しにくいという問題を明らかにした。

4. 現行の教科書所収の作文単元 (意見文)

現行教科書の意見文の単元では、香西のいう「反論」が取り入れられ、かつての生活意見文は姿を消した。たとえば、M社の意見文単元「わたしにとっての『平和』」⁶⁾には、児童作文例に次のような学習の手引きが示されている。

▽中原さんが予想した反論は何か。

▽中原さんは、反論に対してどう答えているか。

▽あなたは、中原さんの「反論に対する答え」を有効だと思うか。

また、T社の意見文単元「『わたしの意見』を書こう」⁷⁾では、反論による論理展開の構造がよく分かるように、次のような構想表が提示されている。

○自分の意見 (どんな問題に対して、どのように考えたか)

○意見の理由や根拠

○予想される反対意見と、それに対する反論

○自分の意見（まとめ）

あえて自分とは異なる意見を予想し、それに反論するという形になっているところが特徴である。例示されていた児童作文では、反論の箇所で次のような記述がある。ここには、生活文のような一人称主語の過去形で再現的に表現されるような文は見うけられない。

「外国から入ってきたものなどは、かたかなで表すしか方法がないのだからしかたがないと考える人もいるかもしれません。確かに、その言葉にぴったり合う日本語がないときもあるかもしれません。しかし、外国語を、そのままかたかなにただけでは、結局、それがどういう意味なのか分かりません。」

なお、かつて実施されていた日本語文章能力検定協会主催の日本語文章能力検定（準2級）では、T社の作文単元とよく似た文章構成で論説文を書く問題が出題されていた。

5. 意義と課題

小学校高学年の教科書に反論型の意見文単元が設定されるようになったことによって、情緒的な表現に偏りがちであった子どもたちに、論理的に考え表現するとはどうすることかを学ばせることができるようになったことの意義は大きい。他者の立場、事情、経験、考えなどを推測しながらそれに対応するように自分の考えや表現をつくりだしていくことによって、双方向の表現を活性化させ論理的な思考を深めていく可能性を高めるからである。生活文に偏った指導を脱して、反論型の意見文のように文種の特徴を反映した作文単元の開発が進んでいけば、今後、大学入学時の学生の論理的表現力は高まっていくのではないかと期待される。

これからの課題を二つあげる。一つは、さきの反論型の意見文のような単元を、意見文以外の文種においても開発することである。そのためには、文種にあった思考方法と文体をつくりだしていかなければならない。説明する、報告する、描写することの固有の特徴は何かを解明し、その特徴をいかした表現方法や文体を開発していくことが早急に求められる。もう一つは、生活文がもっていた自己表現（自分らしさの表現）の機能をどのように具現化するかという問題である。生活文では、書き手のもつその子らしい心情や考えを、一人称主語で直接的に表現することができた。しかし、意見や説明、文学の文章では、書き手が自分らしさを思いどおりに表現するのは容易ではない。文章の個性を読み取ることと関連づけて、自分らしく表現することの方法を見つけ出していく努力が求められる。

おわりに

研究集会で発表する機会をいただいたことに感謝申し上げます。また、質疑の中で、生活綴方教育の意義、反論型意見文の課題、教科書を用いた教育現場の指導の実態等について貴重なご意見を賜りました。これらの課題について、教科書教材の再調査もふくめて取り組んで参りたいと存じます。

注

- 1) 福田梅生「生活文」『国語教育研究辞典』明治図書、1991、p. 544
- 2) 大熊 徹「作文教材」『国語教育指導用語辞典』教育出版、1990、p. 184
- 3) 渋谷 孝「『作文技術』で作文の転換を図る」『教育科学国語教育』No. 485、明治図書、1994、pp. 5-6
- 4) 香西秀信『反論の技術』明治図書、1995、p. 20
- 5) 同上 p. 24
- 6) 『国語 六 創造』光村図書、2011、pp. 84-89
- 7) 『楽しい国語 六 上』東京書籍、2011、pp. 70-75